

四十三 忘れもの

一、両親の写真を入れた財布

昭和二十七年の夏だったと思います。そのころ私は京都に住んでいたのですが全国大会を開くので上京したのです。その時用事があって上京する義母といっしょに九歳くらいになる長男敏雄を連れて汽車の二等に乗ったのです。そのころの汽車は一等、二等、三等と三つに分かれていたのです。私はいつも三等に乗っていたのですが、この時は義母が七十歳を越えていたので二等に乗ったのです。今でいえばグリーン車に乗ったのです。その時のことです。私が手洗いから出て来て十分もしたかと思う時びっくりしたのです。それは手洗いの中に財布を忘れていたのでした。びっくりしたのです。お金はたくさん入れてなかったのですが、何でもなかったのですが、両親の写真を入れていたのです。私はいつも両親の写真をお守りにして、財布の中に入れていたのです。今は内ポケットに入れていますが、そのころは財布の中に入れており、それを忘れたのですからびっくりしたのです。それからすぐ急いで探しに行ったのですがなかったのです。誠に茫然として暫くはものも言えなかったのです。仕方がないので失望しながら手洗いから出て来たのです。ところがちょうどそのとき車掌さんが通りかかったので呼び止め事情を話したのです。ところがその車掌さんが「それはお客さんが拾って届けてくれました。これでしょう！」と見せて